

骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

白山社及び駒形根神社

令和7年3月

一関市教育委員会

序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺きょうぞうべつとうりょう経蔵別当領であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されており、平成17年には国史跡「骨寺村ほねでらむらしやうえん荘園遺跡」に指定、平成18年には国重要文化的景観「一関本寺の農村景観」に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、平成23年6月に世界文化遺産に登録されました。その関連資産として位置付いている骨寺村荘園遺跡について、当教育委員会では継続して調査研究を行っています。

本年度は、国指定史跡骨寺村荘園遺跡のうち、白山社及び駒形根神社で確認調査を実施し、その成果を本報告書にまとめました。駒形根神社境内地の調査を令和4年度から継続しており、その結果、境内地の造成が複数回行われていたことが明らかになりました。

本報告書により調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待するとともに、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際してご協力を頂きました地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々に衷心より感謝を申し上げ、本報告書発行のあいさつといたします。

令和7年3月

一関市教育委員会

教育長 時 枝 直 樹



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（複製）原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図（複製）原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図 原典は中尊寺蔵



拝殿北東部全景



拝殿・神楽殿間全景

例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和6年度に行った骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。
- 3 調査は、平成7年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』(中尊寺蔵)の現地として、一関市巖美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲及び内容確認のため発掘調査を実施したものである。
- 4 令和6年度の調査対象地は、骨寺村荘園遺跡のうち「白山社及び駒形根神社」の駒形8-1地点(駒形根神社境内)である。
- 5 調査主体は一関市教育委員会 教育長 時枝直樹であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 6 調査体制は以下のとおり。

一関市教育委員会事務局文化財課	副参事兼文化財課長	氏 家 克 典
	課長補佐兼文化財係長	金 野 修
	学芸主査	菅 原 孝 明
	文化財調査研究員	千 葉 孝 弥
		菅 原 わかな
	会計年度任用職員	小 岩 誠 也
- 7 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は菅原わかなが行った。
- 8 本書図3に使用した地形図は、一関市長の承認を得て測量成果を使用したものである。(許可番号 令和7年2月12日政第11005号)
- 9 土層断面図の土色表示は『新版標準土色帖 2002年版』(財団法人日本色彩研究所)を使用した。
- 10 測量に使用した経緯度の基準は世界測地系「平面直角座標系X」を使用した。
- 11 挿図中の高さは標高値を示している。
- 12 調査補助業務は、本寺地区地域づくり推進協議会に委託した。
- 13 報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会及び同史跡部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備推進会議の指導と助言を得た。
- 14 調査協力者・機関(敬称略・50音順)
及川幸子、小岩寿男、佐々木源輔、佐藤光雄、平山勇、茂庭文朝、菅原弘樹(奥松島縄文村歴史資料館)、文化庁、岩手県教育委員会、骨寺村ガイドス運営協議会、本寺地区地域づくり推進協議会

目 次

序	1
カラー図版	3
例言	7
目次	8
1 位置と環境	9
(1) 一関市の位置と環境	
(2) 骨寺村荘園遺跡の位置と環境	
(3) 歴史的環境	
(4) 骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果	
2 調査に至る経緯	14
(1) 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み	
(2) 令和6年度調査に至る経緯	
3 白山社及び駒形根神社の調査	23
(1) 調査経過	
(2) 拝殿北東部	
(3) 拝殿・神楽殿間	
(4) まとめ	
4 総括	31
写真図版	33

1 位置と環境

(1) 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年(2005)9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年(2011)9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km²である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山(須川岳)を中心とする火山性山岳風景地の国指定「栗駒国定公園」(昭和43年(1968))や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」(平成17年)および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」(平成18年(2006))、下流部には磐井川によって滝或いは急流、深淵となって変化に富んだ渓谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「巖美溪」(昭和2年(1927))がある。市の東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「猊鼻溪」(大正14年(1925))がある。

(2) 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230m~260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班(総括：広田純一)による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底(縦方向)と河岸(横方向)への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により巖美層に褶曲が生じているためであるという(土井2012)。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している(島田2012)。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物(オモダカ・サジオモダカ属)の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサヤソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている(平塚他2012)。ただし十和田a火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についてもやはり発掘成果との突合が不可欠である。

(3) 歴史的環境

中尊寺文書 骨寺村の中尊寺莊園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光^{じざいぼうれんこう}という僧侶が、紺紙金銀字交書一切経^{こんしきんぎんじこうしよいつさいきょう}を奉行し、8年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年（1126）三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する譲状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」（文保2年（1318）3月）・「骨寺村在家日記」（室町時代か）があり、貢納者と品目が書き出されている。

吾妻鏡 文治五年（1189）の奥州合戦で奥州藤原氏は滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮^{あんどん}は所領の安堵を求めるため、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院の祈願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈禱料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦により住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至（村境）を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鑑懸^{かぎかけ}、西は山王窟^{さんのうのいわや}、南は磐井川^{みねやまどう}、北は峯山堂（から）馬坂^{まさか}である。**陸奥国骨寺村絵図** 中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。簡略絵図（仏神絵図）と呼ばれるもの（カラー図版1）、詳細絵図（在家絵図）と呼ばれるもの（カラー図版2）である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図（カラー図版3）と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天（上）に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これらの絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が示されてきたが、紙裏絵図と文字が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

磐井郡西岩井村絵図（元禄十二年（1699）） 磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串^{いっくし}村の中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに、「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

平泉雑記（安永二年（1773）） 平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

風土記御用書出（安永四年（1775）） 仙台藩が領内の各村から提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺^{はごうほんでら}」として記載され、名所や旧跡等がその由来とともに細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある

「六所明神、小名 若神子」、^{わかみこ}「山王社、小名 山王山」、^{ふどうのいわや}「不動窟、小名 真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である^{かんざんふどき}「関山風土記」には、^{じえづか}慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）ことが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園ではなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

（４）骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代中期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。平成21年度調査で逆茂木が^{おとしあな}残る陥穴を、22・23年度で楕円形の^{おとしあな}陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の竪穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。また、29年度調査では、平泉野台地北西部で自然堆積層中から縄文時代中期から弥生時代初頭の土器片が出土した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの^{はじき}土師器や^{すえき}須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器坑や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、どうやらこのあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。^{とおにし}遠西遺跡からは、12世紀の^{とこ}常滑窯産三筋壺と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の^{りゅうせんようけいせい}龍泉窯系青磁^し鎚^し蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

そして駒形根神社境内では、令和5年度調査において、12～13世紀と推定される^{てつげい}鉄磬、13～14世紀と推定される灯明皿片、時期は明確でないが経筒の蓋と思われる鉄製品などが出土した。特に、磬は法会において読経の際に導師が叩く^{ぼんおんぐ}仏具（梵音具）であり、法会に関わるものが出土したのは初めてである。これらの出土品により、駒形根神社境内が中世から現代に至るまで宗教的な場所として認識され、人々に利用されてきたことが裏付けられた。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。平成22年度調査では塚本体および周辺の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。^{おおぼりそう}大堀相馬窯産の土瓶や瀬戸窯産の^{せとようざん}燈明具^{とうみょうぐ}など近世以降の遺物が出土している。また令和5年度の調査では、寛永通宝や石製の宝珠など同じく近世の遺物が出土した。

周辺の慈恵大師に関わる石造物は、近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『^{ほうないふどき}封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後である

ことが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

令和5年度には山王窟を調査した。窟入口から西側の急斜面を手掘りした結果、かわらけ片、寛永通宝、鰐口片などが出土した。これらの遺物は近世から近代にかけてのもので、この時代には奉納の場所として利用されていたようである。

他の調査成果としては、梅木田遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が少ないため、年代の推定が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は弥生時代以降の一時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。

(一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「1.位置と環境」を引用、加筆)

(菅原孝明)

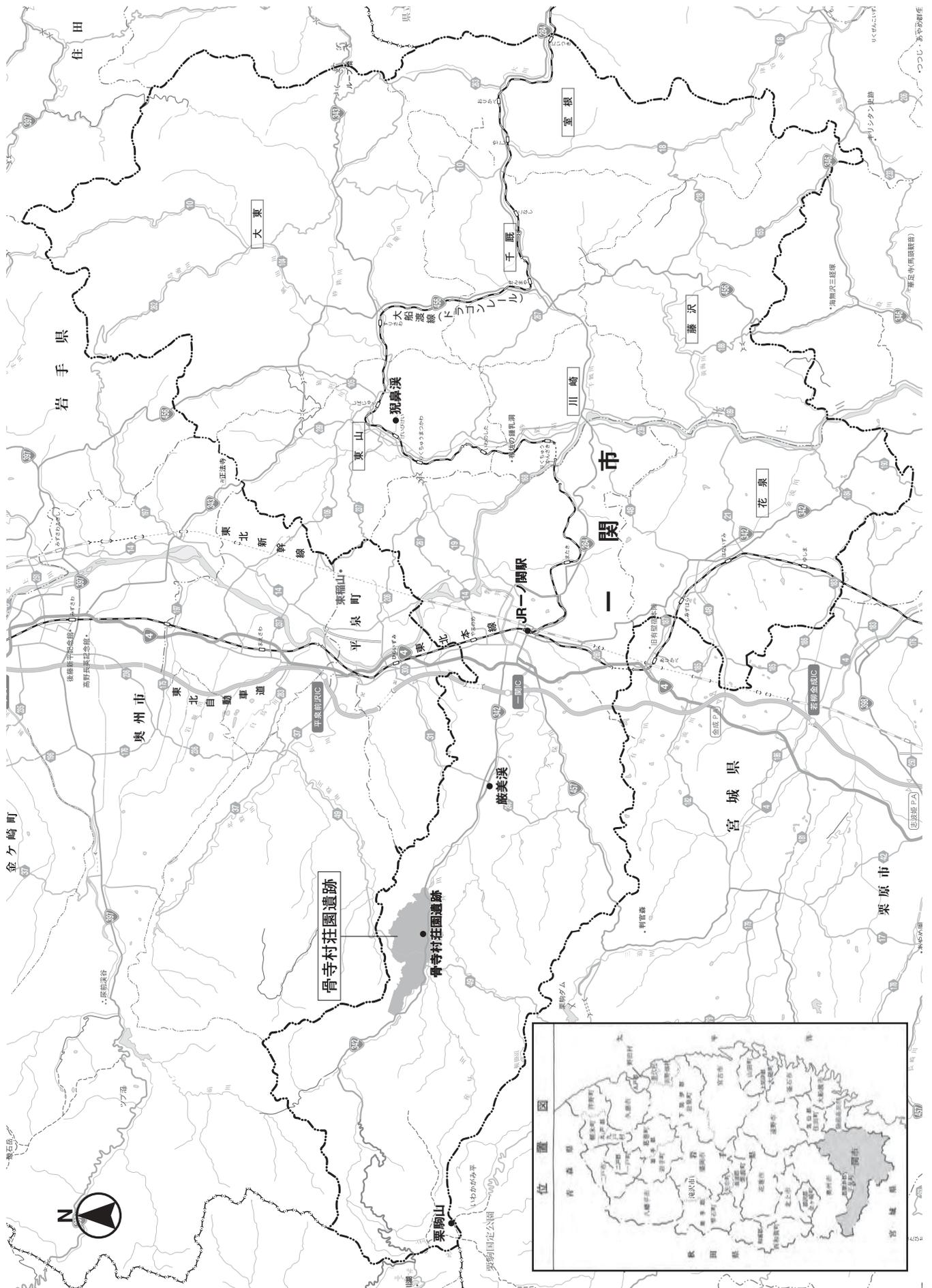


図1 骨寺村荘園遺跡位置図

2 調査に至る経緯

(1) 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会（委員長、東北学院大学教授大石直正氏）発足 歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査を開始、1/2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村 荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を 活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会設置
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全・活用、世界遺産登録に向け、 集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される 文部科学省告示第22号 (山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、 要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂(拝殿))
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした337.5haが国内2番目の重要文化的景観に選 定 文部科学省告示第121号
平成18年9月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産 条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」と した世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年8月26～30日	イコモス現地調査
平成20年5月	イコモス「登録延期」を勧告
平成20年6月14日	岩手・宮城内陸地震(マグニチュード7.2)発生。震源地は本寺地区の西方 約3km

平成20年7月	世界遺産委員会で「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡（若井原188番外地点）確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、9世紀代の須恵器と土師器出土
平成21年4月4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において、平成23年の世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年1月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査および三次元測量の実施、近世地誌類や出土遺物、石造物の整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（若井原194-1地点）確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年9月8・9日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年3月11日	14時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴確認
平成23年5月	イコモス「登録」を勧告
平成23年6月29日	世界遺産委員会で「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定 但し、柳之御所遺跡は除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴、十和田 a 火山灰確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に関係者（県教育長、二市一町首長）会議 開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、土地造成と掘立柱建物確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎗蓮弁文碗片出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成26年1月7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川4、6地点）確認調査、中川4地点の塚の自

	然科学分析を実施、13世紀後半と推定
	梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定 文部科学省告示第6号
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け
	梅木田遺跡確認調査、17世紀以降掘立柱建物確認
	平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査、17世紀以降の段切り造成区画確認
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認
	白山社及び駒形根神社（駒形5、若井原194-1地点）確認調査、縄文土器、住居跡確認
	平泉野遺跡（中川9、若井原194-115地点）確認調査、35m以上の溝確認、塚の構築年代を16世紀遺構と結論付け
	山王窟三次元測量
平成28年8月4～6日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催 （第8回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成28年10月3日	第9回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年12月3・4日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成29年1月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）確認調査、側溝とみられる溝2条、 竪穴状遺構確認
平成29年6月22日	第11回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年8月5日	「平泉の文化遺産」国際会議 開催（平成29年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会と位置付け）
平成29年8月6日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催（第12回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成29年9月8日	第13回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年3月7日	第14回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1、194-2地点）確認調査、竪穴状遺構、フ ラスコ状土坑確認
	駒形45-4地点確認調査、柱穴、土坑確認
平成31年3月23日	第15回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和元年度	駒形45-4地点確認調査、遺構は発見されず、自然科学分析を実施し縄文時代 と推定
令和2年度	駒形4-1地点確認調査 土坑確認
令和3年3月12日	第16回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催

令和3年度	駒形1-1地点確認調査
令和3年9月19日	骨寺村荘園遺跡研究集会 開催
令和4年1月6日	第17回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和4年3月18日	第18回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和4年度	平泉野遺跡（若井原194-1）確認調査、竪穴住居、竪穴遺構確認 白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査、8世紀の土師器確認
令和4年8月18日	第19回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和5年度	白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査、鉄磬、13世紀の灯明皿出土 慈恵塚確認調査 山王窟確認調査
令和5年8月30日	「平泉の文化遺産」拡張登録に係る関係者会議において、柳之御所のための推薦書素案作成、関連資産を含んだ10資産を「ひらいずみ遺産」と位置づけ、一体的な保存管理・調査研究・活用及び発信に取り組むことを確認
令和6年度	白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査

(2) 令和6年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成8年度から骨寺村荘園遺跡の調査を始め、11年度から発掘調査を実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区で、絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。

調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。一方、宗教施設の調査については、令和5年度調査により駒形根神社境内から鉄磬が出土したことで、現在の宗教施設が中世に遡る可能性を見出せた。今後の調査研究の進展が期待される。

市教育委員会は、平成15年から骨寺村荘園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして、世界文化遺産への登録を推進してきた。しかし、20年に平泉は登録延期となり、骨寺村荘園遺跡は資産候補から外れ拡張登録を目指すことになった。その後、23年に「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界文化遺産に登録され、翌24年には、骨寺村荘園遺跡のほか、柳之御所遺跡、達谷窟、白鳥館遺跡、長者ヶ原廃寺跡の5つの拡張予定資産を想定した、「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界遺産暫定一覧表に記載された。

これを受け、拡張登録を目指す関係区市町間で25～29年度、さらに平成30～令和4年度まで延長して調査を実施したが、拡張登録につながる顕著な普遍的価値の証明に至らなかった。令和5年の県市町関係者会議により、柳之御所遺跡のための推薦書素案作成、関連資産を含む10資産を「ひらいずみ遺産」と位置付け、一体的な保存管理・調査研究・活用及び発信に取り組むこととなった。

令和6年度は、平成21年度から実施している発掘調査計画を改定した第3期計画（令和4～令和8年度）の3年目にあたる。駒形根神社境内のうち、拝殿の北東側と南西側を調査した。

これまで（平成11～令和6年度）調査した地点を図2-1、図2-2、表1に示した。

（一関市教育委員会2024『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「2 調査に至る経緯」を引用、加筆）
（菅原孝明）

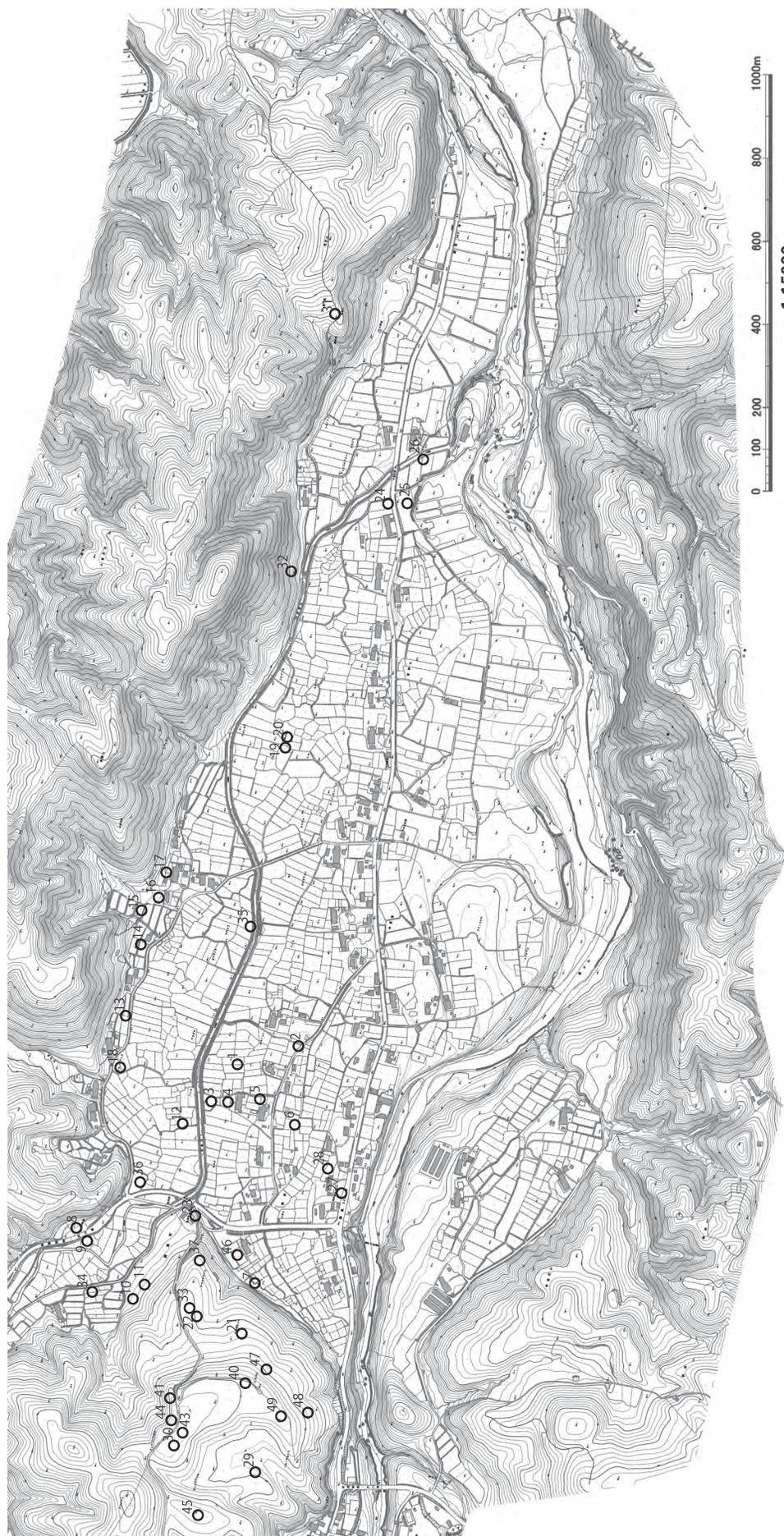


図2-1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点（1）

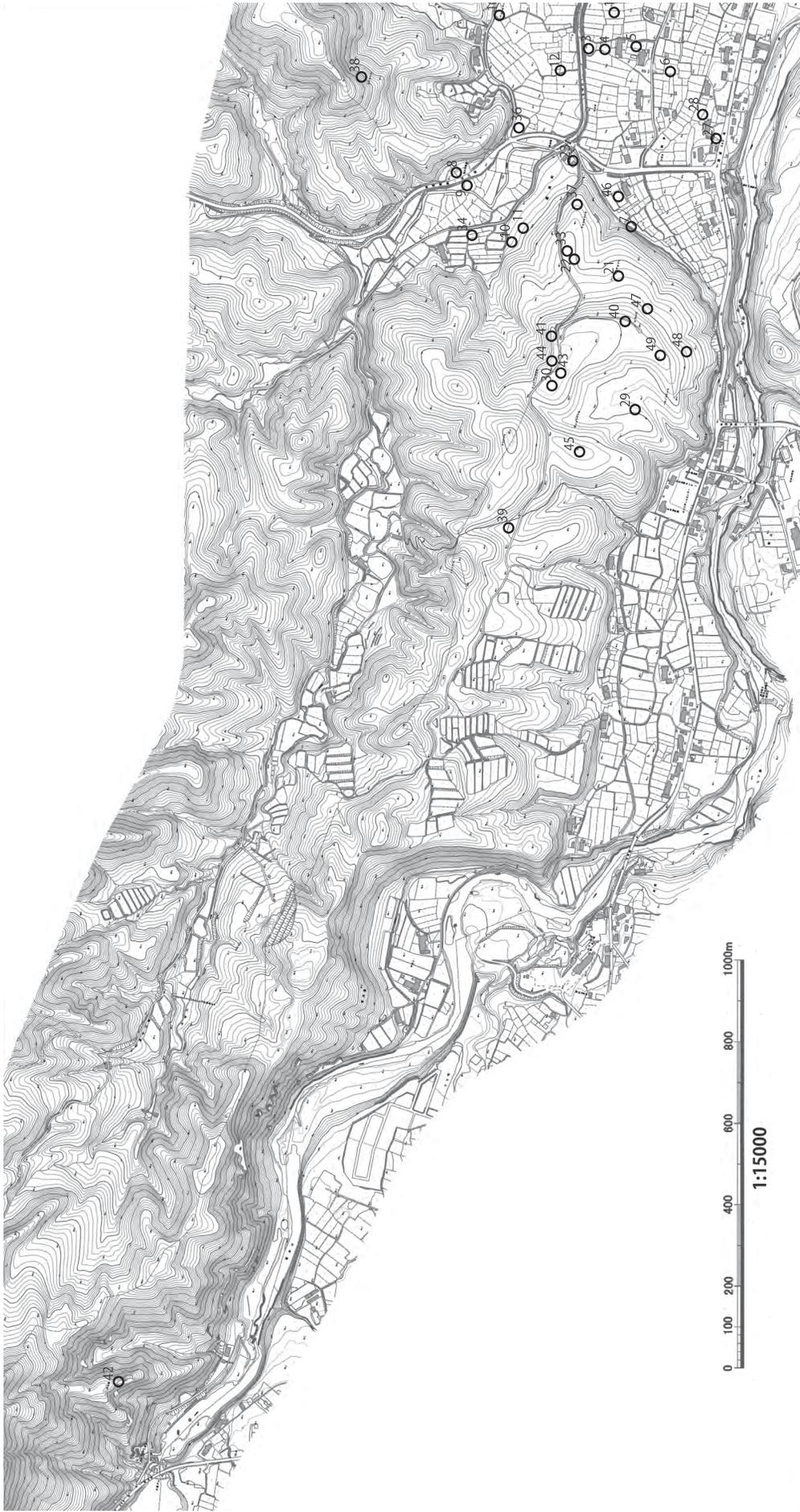


図2-2 骨寺村莊園遺跡における既調査地点(2)

番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器	平成12・25～27年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-21、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯跡	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鏃、土師器片、かわらけ（灯明皿）、陶磁器片、鉄磬、鉄釘、近代銭	平成18・令和4・5・6年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	落とし穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器片、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、25-7、慈恵塚	周溝、陶器片、石製品、鉄滓、銭貨	平成22・令和5年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、石器剥片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	落とし穴、縄文土器片、石器剥片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	近世磁器、縄文土器片	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器片、土偶、石器、近世陶磁器片	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	道路遺構	平成28・29年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物、土器、石器、鉄製品、銭貨	平成28・令和5年度
43	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴状遺構、縄文土器片、弥生土器片	平成29・30年度
44	中川9、平泉野遺跡	土坑、縄文土器、石器、陶器	平成30年度
45	若井原194-2、平泉野遺跡	溝	平成30年度
46	駒形45-4	土坑、ピット、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片、陶磁器片	平成30・令和元年度
47	駒形4-1	土坑、縄文土器片、礫石器、石製品	令和2年度
48	駒形1-1	炭窯跡、土坑、柱穴状ピット、溝、縄文土器片、石器	令和3年度
49	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴住居、竪穴遺構、土坑、落とし穴、埋設土器、柱穴状ピット、縄文土器片、石匙、削器、匏型石器、磨製石斧、磨石、凹石、台石、剥片、黒曜石	令和4年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

表1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表



図3 駒形根神社調査区位置図 (S=1/3,000)

3 白山社及び駒形根神社の調査

今回の調査地は、平泉野台地と呼ばれる丘陵地の北側斜面の縁辺部にあたり、その低位段丘の東端部（一関市巖美町字駒形8-1）に所在する駒形根神社境内を対象として調査を行った（図3）。調査地点は拝殿北東部の斜面と、拝殿・神楽殿間の平坦面である（図4）。

調査期間は令和6年4月9日から7月31日であり、調査面積は約34㎡である。拝殿北東部の調査成果がおおよそまとまった7月11日には、骨寺村荘園遺跡指導委員会史跡部会を開催し、委員各位よりご指導頂いた。調査終了後は埋め戻し作業を行い、現状に復旧した。

遺構実測図の作成に当たっては、拝殿の北東部に設置した国土座標の基準点（基1・基2）を使用して縮尺1/20の平面図を作成した。測量基準点の成果は以下の通りである。

基1 X = -113521.189、Y = 10048.865、H = 183.630

基2 X = -113509.913、Y = 10035.376、H = 183.989

写真撮影は一眼レフ・デジタルカメラを使用した。

(1) 調査経過

- 4. 9 調査に伴う環境整備開始。
- 4. 12 拝殿北東部の調査区設定（I区・II区）
- 4. 15 発掘調査開始式。終了後器材を搬入して調査開始。人力にて表土除去を行う。
- 4. 16 II区の表土除去後コンクリートの堆積やその下層のII層が現れる。
- 4. 18 II区のII層を除去すると、その下層に旧表土とみられる黒色土が現れ、I区にも広がる様相がみられた。
- 4. 22 測量基準点1・2を設置し、それらを基に調査区北側斜面に平面図作成のための新しい基準点を追加。II層にガラスや近・現代の陶磁器が含まれることを確認。
- 4. 23 II区を拝殿側に拡張。II層に覆われる整地層b・cを発見。
- 4. 24～6. 3 調査一時中断
- 6. 4 II区拡張区の整地層精査（～6. 6）。
- 6. 7 トータルステーションを使用して、I・II区の平面図作成。午後は雨天のため作業中止。
- 6. 10 I区のIII層を除去。地山面まで掘り下げたが遺構は検出できなかった。II区をさらに拝殿際まで拡張。
- 6. 12 I～II区の土層断面図作成し、拝殿北東部における上層の調査は終了する。



調査区設定



作業風景



指導委員会史跡部会の現地視察（7.11開催）

- 7. 11 骨寺村荘園遺跡指導委員会史跡部会を開催。
- 7. 16 II区の整地層に小トレンチを入れ、断面図作成(～7. 18)。
- 7. 18 II区のⅢa層上でSK01を検出。I区埋戻しと並行して拝殿・神楽殿間の調査区設定。
- 7. 19 拝殿・神楽殿間において1・2トレンチの表土を除去。
- 7. 22 トータルステーションを使用して、1・2トレンチで各層の分布状況の平面図作成(～7. 24)。
- 7. 23 拝殿北東部のII区の埋戻し作業。
- 7. 25 雨天の中、拝殿・神楽殿間の1・2トレンチ埋戻し作業。
- 7. 30 器材を整理し、調査区の埋め戻しの状況を確認。
- 7. 31 器材等を搬出し、調査を終了。



拝殿・神楽殿間の調査区全景 北東より

(2) 拝殿北東部

①調査区の配置(図5)

令和5年度に駒形根神社境内の南東部斜面の調査を行ったことから、今年度は北東部斜面の様相を明らかにするため、拝殿の北東部を調査の対象とした。

立木を避けてトレンチを2箇所設定し(北からI区・II区)、この斜面における連続した土層堆積図を作成できるよう配慮した。I区は3.5×1.5m、II区は5.0×2.5m(のち7.5×2.5mに拡張)、調査面積は合計約24㎡である。

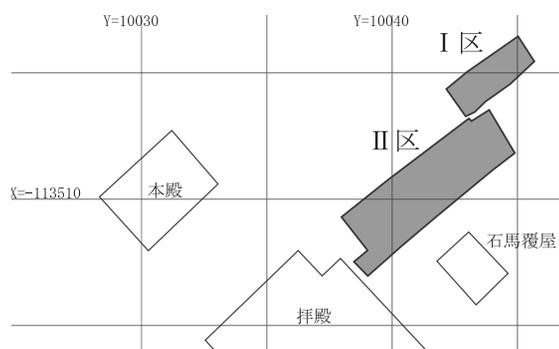


図5 調査区の配置(S=1/300)

②基本土層(図6)

I a層 腐植土や砂などを主体とした表土である。整地層aを覆っており、層厚は約20cmである。

I b層 玉砂利を含む厚いコンクリート層やその破片を多く含む層で、II a層を覆っている。SX01整地層aの北側に分布している。層厚は厚い部分で約20cmである。

I c層 褐色土を主体とする層で、コンクリート片を含む。II区北西部に分布し、II a層とⅢa層を覆っている。層厚は厚い部分で約70cmである。

II a層 拝殿の東側2m付近から約7mの範囲にかけて分布する褐色土層で、ガラス片やビニールを含むSX01整地層aに覆われ、SX02整地層bを覆っている。層厚約12cmである。

II b層 II区北東部に分布する黒色土を主体とする層で、II a層と接している。II a層とともにガラス等を含む土坑埋土の窪みに堆積している。

III層 黒色土を主体とする層で、拝殿東側から約4.8mの範囲に広がっている。締まりはやや弱い。この層はⅢa層、Ⅲb層に細分することができ、Ⅲa層はⅢb層を直接覆っている。Ⅲb層は地山直上に堆積しており、この層の上面でSK01を検出した。これらは旧表土と考えられ、層厚はⅢa層が約15～27cm、Ⅲb層が約5～13cmである。Ⅲb層から縄文土器の破片が出土している。なお、I区のⅢx層は色調や土質が第III層に近似するが、II区北東部の土坑によって分断され

ているため両者の関係は明らかにできなかった。

IV層 黄褐色の地山である。斜面下方のI区では固く締まり、上方のII区ではもろい部分もある。地山面の標高は拝殿の際で約183.05m、I区北東端部で約180.75m、比高差3.0mの斜面となっている。

③発見した遺構と遺物

SX01整地層a (図6、写真図版3)

II区南半部のII層上面に施工された整地層である。上下2層に区分でき、いずれも暗褐色土を主体とする。上層は、切石などで粗く土留めされた形跡があり、下層は締まりが弱い。層厚約70cmである。上層の切石は石馬覆屋の北東側にも露出しており、その周縁を護岸している状況から、SX01はその造成に伴う整地層と考えられる。

SX02整地層b (図6、写真図版3)

II区のスX03整地層c上面で確認した整地層である。黒色土主体で黄褐色土ブロック(地山土)を多く含む。西端は南西方向に屈曲し、整地層cを一部壊している。層厚約30cmである。遺物は、土器細片と石匙が出土している。

SX03整地層c (図6、写真図版4・5)

拝殿の際から約2.8mの範囲で確認した整地層である。黄褐色土(地山土)を主体とし、小礫を多く含む上層と、黒色土を主体とした下層で構成され、拝殿の下へ延びている。層厚は上層が約20cm、下層は拝殿の際で26cmである。現拝殿のコンクリート製の基礎はこの整地層の上面に直接設置されており、拝殿の北東部周辺にはこの層の上層が露出して地表面となっている。下層はⅢa・Ⅲb層と色調や土質が類似しているが均質でなく、複数に細分される状況から旧表土を使用した整地層と考えられる。遺物は出土していない。

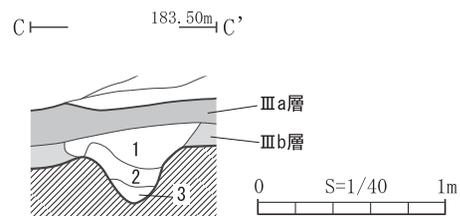
SK04土坑 (図7)

II区の南壁際で発見した土坑である。Ⅲb層上面から掘り込まれており、Ⅲa層によって覆われている。検出した部分で見ると、規模は東西60cm、南北45cm以上で深さは約40cmを測る。平面形は楕円形で、断面形は概ねV字形を呈する。堆積土は3層に区分でき、いずれも黒褐色土を主体とする。1層は上層のⅢa層よりもくすんだ黒褐色土で、2層は暗褐色土で黄褐色土のブロックを含む。3層は褐色土である。遺物は出土していない。

(菅原わか)



SK04 北より

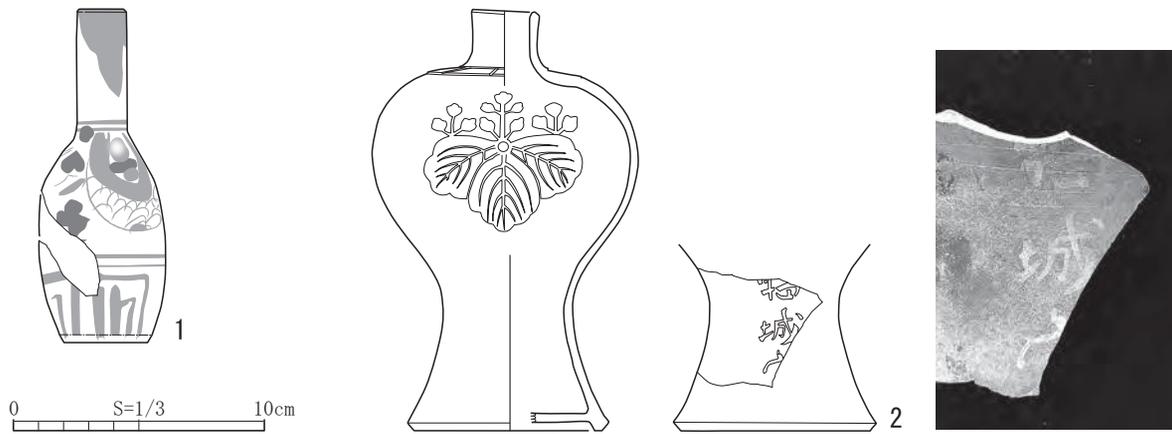


層位	土色・土性	特徴
1	10YR2/1黒色土	締まりややあり粘性なし。
2	10YR3/2暗褐色土	締まり・粘性なし。
3	10YR4/1褐色土	締まり・粘性なし。

図7 SK04断面図 (S=1/40)

遺構外出土遺物（図8）

Ⅲ3層から縄文土器が1点出土している。縄文がわずかに確認できる。Ⅱ層から土師器が1点、種別不明の土器が2点、石鏃が1点、銭貨（一銭）が2点、銅製の軒先木口金具や銅板の端切れなどが出土した。土師器は甕の底部破片とみられ、外面にはヘラケズリの痕跡がある。銭貨は大正11年と昭和11年に製造されたものである。軒先木口金具は方形の垂木の木口を覆ったとみられるものであり、屋根の葺き替えで生じたとみられる銅板の端切れはⅠ層からも多数出土した。Ⅰ層やⅡ区北半部の攪乱層からは大正以降の磁器の瓶子、盃、皿、湯呑茶碗や種別不明の土器1点が出土している。瓶子は2点ある。1は陶器で、体部上半部が強く張り、下半部はくびれたいわゆる締め腰の器形である。外面は無釉で内面には灰白色の失透釉が全面に施されている。外面肩部の一面に五三桐文が描かれ、その反対側の面には「□城□」の文字がある。いずれも白土が使用され、桐文は白土型紙摺かとみられる。2は色絵磁器で御神酒徳利と呼ばれているものである。首が細長く体部も細身の器形で、体部下半には抽象化された連弁文、その上には草花などが赤や青の顔料で荒々しく描かれている。赤色は発色が悪く大部分が黒褐色を呈するが、露胎となっている部分では赤色に発色している。



番号	種別	名称	遺構・層位	特徴
1	陶器	瓶子	Ⅰ区・Ⅱ区Ⅰ層	外面：無釉、白土型紙摺で五三桐文様、白土で「□城□」の筆書き。 内面：全面に灰白色の釉。
2	磁器（色絵）	御神酒徳利	Ⅰ区Ⅰ層	外面：粗いタッチで花や蓮弁を筆書き。 内面：頸部上半以下は無釉。

図8 拝殿北東部出土遺物

番号	種別	出土遺構・層位	備考	番号	種別	出土層位	備考
1	土師器甕	Ⅱ区Ⅱ層		7	石鏃	Ⅱ区Ⅱ層	
2	縄文土器	Ⅱ区Ⅲb層		8	剥片	Ⅰ区Ⅲx層	
3	不明（土器）	Ⅱ区整地層b		9	陶器瓶子	Ⅰ区・Ⅱ区Ⅰ層	第8図1
4	不明（土器）	Ⅱ区整地層b		10	磁器御神酒徳利	Ⅰ区Ⅰ層	第8図2
5	不明（土器）	Ⅱ区カクラン		11	銭貨	Ⅱ区Ⅱ層	大正11年製
6	石匙	Ⅱ区整地層b		12	銭貨	Ⅱ区Ⅱ層	昭和11年製

表2 拝殿北東部出土遺物

(3) 拝殿・神楽殿間

拝殿と神楽殿の間は約15m四方の平坦面となっており、平成18年度、令和4・5年度に調査を行っている地区である。令和4・5年度の調査区では黄褐色土層の下に古代の土器や近代の陶磁器・銭貨などを含む厚い黒色土の堆積を確認しており、黄褐色土と、黒色土の中の二つの層を造成土としている。今回の調査は、これまで明確ではなかった黄褐色土や黒色土などの広がりや境内の平坦面における状況の確認を目的として実施したものである。調査区の設定にあたっては、過去の調査成果との整合性を図るため、既設の調査区に沿うように2か所のトレンチを設定した(図9)。1・2トレンチは長さ5.0m、幅0.8m、3トレンチは長さ1.6m、幅1.4mで、調査面積は合計約10㎡である(図10)。

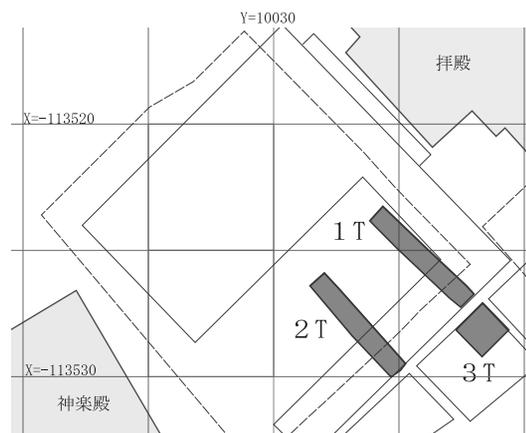


図9 調査区の配置 (S=1/300)

1・2トレンチとも薄い表土を除去すると現在の境内の南東端部から約6.5m付近で地山(岩盤)を検出し、その南側に地山に似ているがやや軟質の黄褐色土、黒色土が順に現れ、黒色土の上面は黄褐色土によって整地されている状況を確認することができた。遺存状態は良好である。やや軟質の黄褐色土は整地層の可能性があり、2トレンチの北側でも地山上に褐色土の堆積がみられた。3トレンチは令和5年度の調査で黒色土を掘り上げた地点に設定し、壁面の土層断面で黒色土の堆積状況を観察するにとどめた。

(4) まとめ

拝殿北東部の調査では、石馬覆屋が立地する整地層aの下層に、旧表土上に造成された黒色土主体の整地層bと黄褐色土主体の整地層cがあり、拝殿の下まで延びている状況から、拝殿付近は造成によって拡大した境内の端部に造営された状況を確認することができた。このような整地層は、拝殿・神楽殿間を対象とした令和4・5年度の調査において、現地表に露出している黄褐色土の下層に厚い黒色土が堆積する状況や、境内の内側から外側に斜めに土を重ねていく状況とおおむね共通するとみることができる。一方、拝殿・神楽殿間の調査では、地山(岩盤)や黄褐色土・黒色土など各層の分布状況とそれらの保存状態を確認するにとどめたが、平面的な調査によって各層の広がりを明らかにできる見通しが得られた。

駒形根神社境内の調査では、鉄髷やかわけなど中世にさかのぼる遺物も出土しているが、現在の境内が整備される以前の様相は明らかではない。それを解明するためにはこれまでの調査における整地地業や遺構のあり方を整理し、現在の境内の成立に至る層位的な変遷を明らかにした上で中世にさかのぼる遺構の存在を確認する作業が必要である。

(千葉)

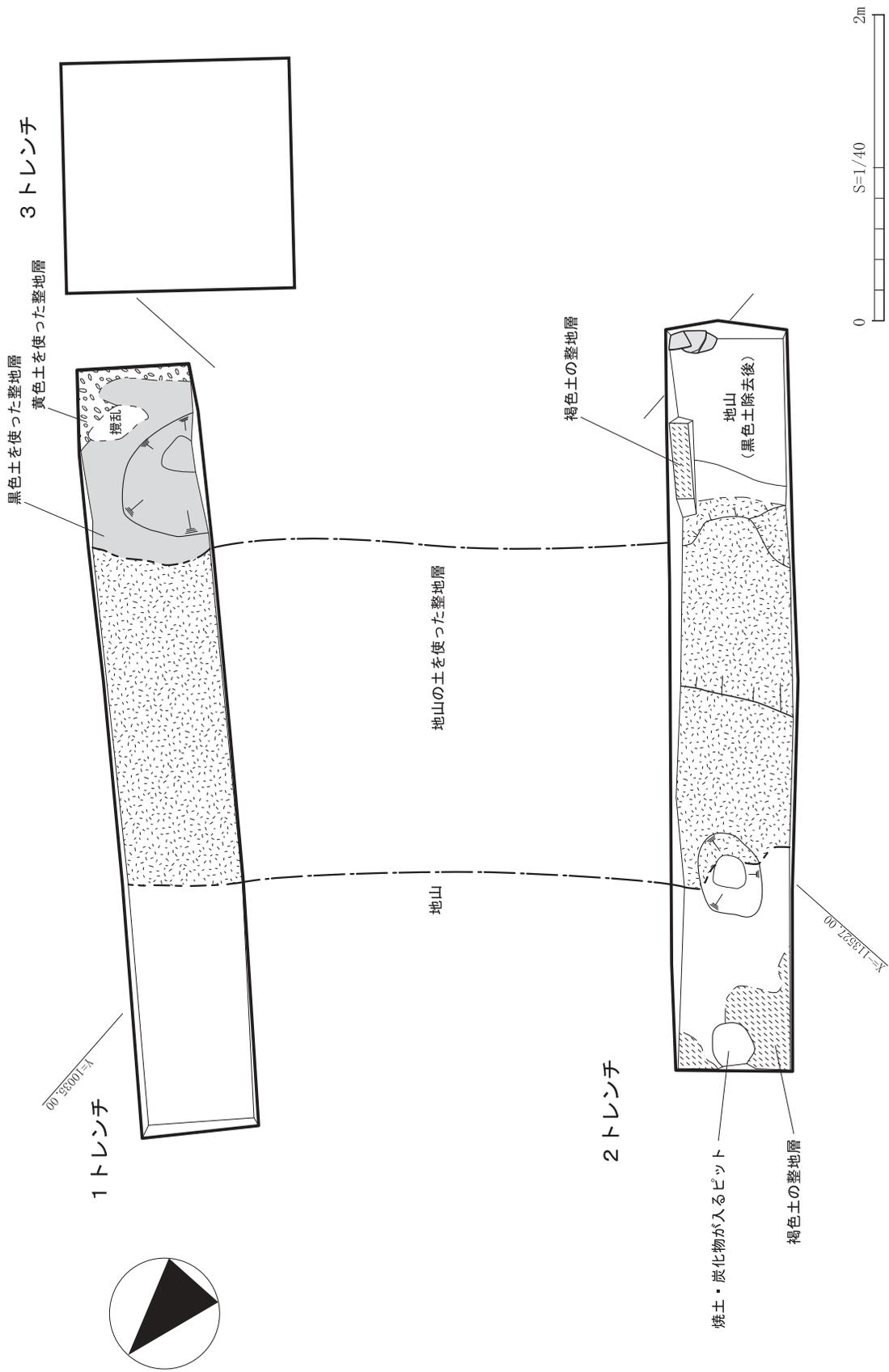


図10 拝殿・神楽殿間平面図 (S=1/40)

6 総括

令和6年度は、白山社及び駒形根神社の調査を実施した。

具体的には駒形根神社の境内で、拝殿北東部の斜面と、拝殿・神楽殿間の平坦面を調査した。拝殿北東部の斜面では、石馬覆屋の下にある整地層a、その下にある黒色土主体の整地層b、黄褐色土主体の整地層cを確認した。現在の拝殿のコンクリート基礎は整地層cの上面に設置されている。また拝殿・神楽殿間の平坦面では、地山の上層に、地山に似た黄褐色土、黒色土を確認した。

これらの結果は、境内の中心から周辺へ拡張し複数回にわたり整地が行われていることを物語っている。整地の時期は明確ではないものの、境内の変遷を探る手がかりを得ることができた。今後は、境内地が整備される以前の地形や整地の時期を整理する作業が求められる。

今回の調査成果を受けて、骨寺村荘園遺跡の研究がさらに進むことが期待される。

(菅原孝明)

【参考文献】

一関市1977『一関市史 第1巻通史』

一関市教育委員会2007『岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第2集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書(第8集)』

一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一関市教育委員会2023『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一関市教育委員会2024『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一関市博物館2011『骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』

一関市博物館2015『骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』

一関市博物館2016『骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』

伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会

入間田宣夫2016「骨寺村の成立は、いつまで遡るのか—骨寺村絵図研究の過去・現在・未来(1)—」『一関市博物館研究報告』第19号

大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号

菅野成寛2020「平泉藤原氏と仏教」『平泉野仏教史』吉川弘文館

黒田日出男1995「陸奥國中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』新人物往来社

佐藤弘夫2006「霊場—その成立と変貌」東北中世考古学会編『中世の聖地・霊場』高志書院

佐藤弘夫2010「霊場と巡礼」『兵たちの極楽浄土』高志書院

島田直明2012「Ⅲ. 骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班

関根達人2009「北奥の一世紀—堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会

平泉町教育委員会1995『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第51集

松本博明2011『一関市巖美町本寺の民俗—骨寺村荘園遺跡のくらし—』一関市教育委員会

土井宣夫2012「Ⅱ. 地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班

- 広田純一・菅原麻美2018「骨寺村荘園遺跡における田越し灌漑システムの実態と骨寺村絵図（詳細絵図）に描かれた水田の推定」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館
- 平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「IV. 一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班
- 吉田敏弘1989「骨寺村の地域像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻 地人書房
- 吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森



1 拝殿北東部 調査前の状況 北東より



2 同上 調査前の状況 北より



1 拝殿北東部 II区 I層の状況 北より



2 同上 II区 II層除去後の状況 東より



1 拝殿北東部 II区 SX01整地層a土層堆積状況 北東より



2 同上 II区 SX02整地層b、Ⅲa層検出状況 東より



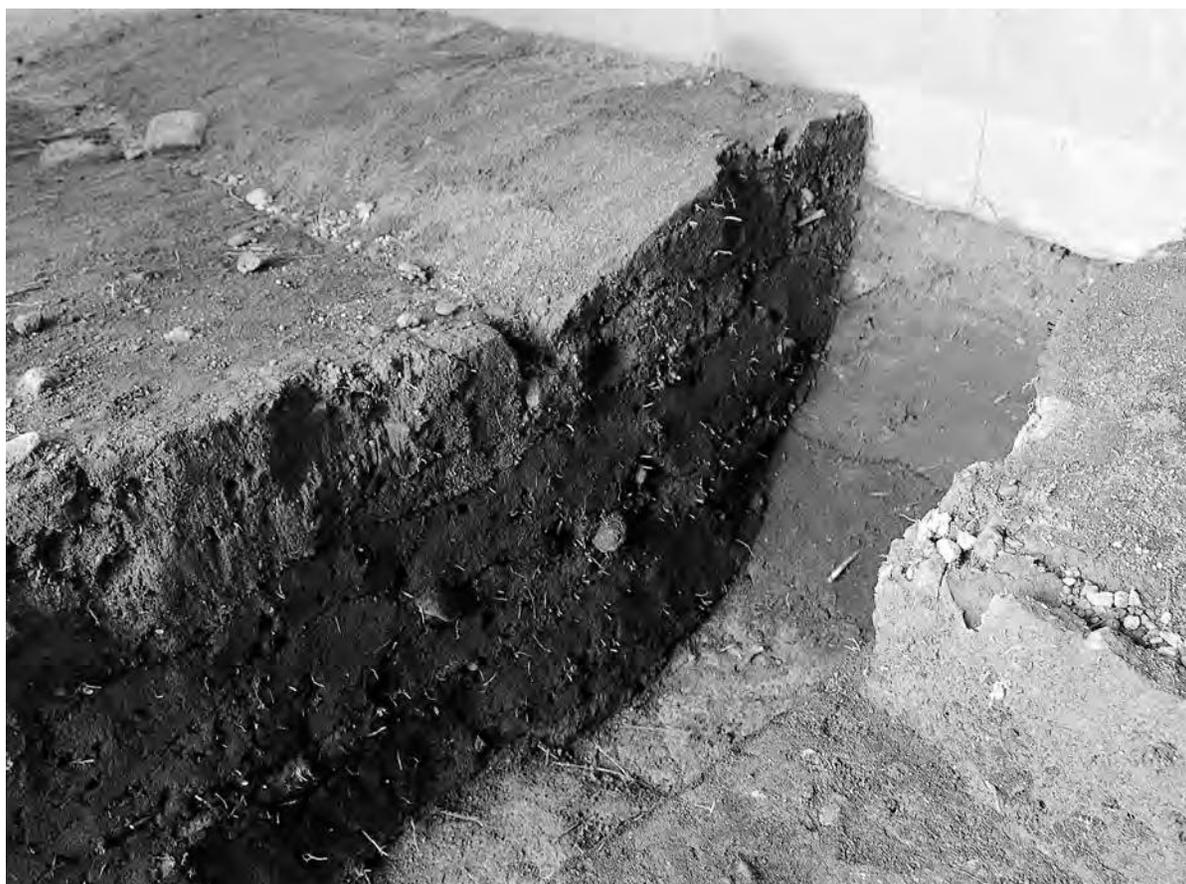
1 拝殿北東部 I区 完掘全景 南東より



2 同上 II区 SX03整地層c、IIIa、IIIb層土層堆積状況 北東より



1 拝殿北東部 II区 SX03整地層c土層堆積状況 北より



2 同上 II区 SX03整地層c土層堆積状況 北東より



1 拝殿・神楽殿間 調査区全景 南東より



2 同上 2トレンチ黒色土除去後の状況 南西より

抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査報告書							
副書名	白山社及び駒形根神社							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第44集							
編著者名	菅原孝明・千葉孝弥・菅原わかな							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒029-3105 一関市花泉町涌津字一ノ町29 TEL0191-82-2242							
発行年月日	2025年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむらしょうえん 骨寺村荘園	いちのせきしげんびちょうあざ 一関市巖美町字 こまがた 駒形8-1	03209	NE72- 2283	38° 58' 35"	140° 56' 55"	20230409 ～ 20230731	34m ²	確認調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
骨寺村荘園	荘園	縄文、中世、近 世、近代		整地層、土坑		縄文土器、石匙、尖 頭器		
要約	令和6年度は、駒形根神社拝殿の北東部斜面と拝殿・神楽殿間の平坦面を調査した。拝殿北東部では旧表土上に造成された整地層の重複を発見し、境内が拡張整備されていく状況を確認した。拝殿・神楽殿間では境内前方の平坦地が6 m以上にわたって造成された状況がみられ、境内の変遷を探る手がかりが得られた。							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集

骨寺村荘園遺跡確認調査報告書

白山社及び駒形根神社

発行 令和7月3月24日

発行・編集 一関市教育委員会

〒029-3105

岩手県一関市花泉町涌津字一ノ町29

電話 0191-82-2242

印刷 川嶋印刷株式会社

〒029-4194

岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21

電話 0191-46-4161(代)